

大河小説『安曇野』の作家 臼井吉見 (前編)
—生涯と業績をふりかえる—

平成 29 年 9 月 28 日(木)



臼井吉見〔1905～1987〕
(臼井吉見文学館提供)



臼井吉見の生家
(撮影協力:臼井家)



臼井吉見文学館
(安曇野市堀金上堀)

1. 年譜と資料で振り返る生涯 (年譜は「臼井吉見文学館」展示のものを参考、一部引用した)

- 明治 38 年(1905)〔当歳〕、6 月 17 日南安曇郡三田村田尻(現 安曇野市堀金田尻)の農家臼井貞吉・きちの次男として誕生する。
- 明治 45 年(1912)〔7 歳〕、4 月村立堀金尋常高等小学校に入学。
- 大正 5 年(1916)〔11 歳〕、11 月同小学校に「常念校長」※資料 1 と呼ばれることになる佐藤嘉市が村(註 当時は昭和の大合併前でまだ烏川村、三田村に分かれていた)に乞われ校長に着任。毎週の朝会で「常念を見よ」と児童に呼びかける。

※資料 1 臼井吉見の回想「幼き日の山やま」(『残雪抄』所収)では「新しい校長が来た。なりは小さかったが、目は鋭く、黒いあごひげが胸の半ばまでたれていた。この校長は、月曜日の朝礼には、校庭の壇上から、毎回、常念を見よ!と呼びかけた。(中略)朝礼といえば、きまって常念の話だった(中略)常念によって、新しい精神の世界を発見した」とある。

- 大正 7 年(1918)〔13 歳〕、4 月旧制松本中学校に入学(このとき入学者は志願者 438 名中、入試に合格した 181 名)、信濃鉄道豊科駅から松本へ通う(冬季は松本へ下宿)。同級生に古田晁(のち筑摩書房社長、臼井吉見を顧問格で社に招く)、赤澤義巳(のち俳優・演劇評論家 松本克平)がいたが、一級上に唐木順三(のち評論家、筑摩書房顧問、『中世の文学』で読売文学賞、評論活動で日本芸術院賞)、二級上に青柳優(夭折の詩人・文芸評論家)がいた。
- 大正 8 年(1919)〔14 歳〕、臼井は下宿の隣室の五年生から借りた『中央公論』の影響で中学二年ころから文学に目覚めていく。特に谷崎潤一郎や正宗白鳥の小説に感銘を受けたという。当時の『中央公論』は滝田樗陰が編集の要で、創作欄が充実。

谷崎・正宗のほか芥川龍之介、菊池寛も愛読。⇒正宗白鳥には後日談がある。

- 大正 12 年(1923)〔18 歳〕、4 月旧制松本高等学校文科甲類に入学。しかし親友となっていた古田は翌年一年遅れで松高文科甲類に入学(一年遅れになった原因は入試に失敗したということではなく、晁と父との間で進学についての考えに違いがあり願書提出が間に合わなかったことによる。浪人中、筑摩地尋常高等小学校代用教員)。中学時代に高じていた文学熱がひどくなる※資料 2。松高文芸部委員の金井融(とおる)と親交を結ぶ。翌年の秋、築地小劇場の演劇を見るために初めて上京。
- 大正 14 年(1924)〔20 歳〕、徴兵検査で甲種合格。

資料 2 柏原成光著『友 臼井吉見と古田晁』〈平成 25 年 筑摩書房〉では「臼井の文学熱は高校に入って、さらに高まり、相変わらずロシア文学を翻訳で手当たり次第に読んだが、チェホフが一番好きになり、チェホフとツルゲーネフだけは丸善からガーネットの英訳版を取り寄せ懸命に読んだりした。さらにイエーツ、シング、グレゴリー夫人などアイルランドの劇や詩などにも親しんだ。また、長塚節や正岡子規・伊藤左千夫・島木赤彦そして『アララギ』へと進んだ彼は、万葉集に親しみ、高校の終わり頃は芭蕉へと広がっていった。この間『中央公論』に連載された正宗白鳥の文芸時評(後の「作家論」)をずっと愛読していた」とある。

- 大正 15 年(1926)〔21 歳〕、4 月東京帝国大学文学部国文科に入学。大方の予想は、臼井は英文科に進学するものだったという。入学早々国文科の内情に失望※資料 3



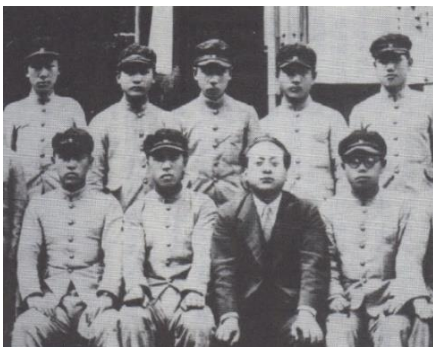
東大時代の臼井(右)と古田
(臼井吉見文学館提供)



東大時代参加した
同人誌『輪舞』(同左)

資料 3 『深志人物誌Ⅱ』(平成 8 年 深志同窓会)の小林俊樹稿によると東大時代について「英語廃止論を説く主任教授藤村作の曲学阿世的ありようには、屈辱さえ感じている。登校は不定期だった。熱心に聴講したのは橋本進吉教授の国語学だけだという。(中略)この頃の関心事は、室生犀星のもとに集まった、四高出身者の同人誌『驢馬』であり、中でも中野重治の書くものであった。/昭和 15 年創業の筑摩書房の処女出版が『中野重治随筆抄』だったのも偶然ではない。(中略)こんな大学の二年余で、卒業必要単位を取得してしまった、昭和三年夏、臼井は信州伊那の地にあった。その春大学を卒えた金井(金井融)がやみがたい文学への志向を断ち、生家の借財整理のためもあって、伊那中の国語教師になっていたからである。ここで臼井は金井のすすめもあり、中箕輪尋常高等小学校の代用教員になっている。(後に実業補習学校)。大学在籍のままである」と書かれている。

- 昭和 3 年(1928)〔23 歳〕、4 月東大在籍のまま上伊那郡中箕輪実業補修学校(同校は戦後、箕輪工業高校、現在は箕輪進修高校となる)の代用教員を務める(教科は国語・西洋史)、東大卒後の昭和 5 年 1 月まで務める。東大在学中、中野重治の作品(小説等)に親しむとともに宇野浩二の小説を愛読。宇野へ小説「魔都」の感想文を送る。
- 昭和 4 年(1929)〔24 歳〕、3 月東京帝国大学文学部国文科を卒業。卒業論文は「自然主義文学」を扱い、当時の東大國文科の「象牙の塔」的常識に反した異端論文であった。
- 昭和 5 年(1930)〔25 歳〕、2 月徴兵検査甲種合格だったため幹部候補生として高崎市にあった歩兵第 15 連隊に入隊、少尉任官後の 12 月に除隊する。
- 昭和 6 年(1931)〔26 歳〕、2 月福島県双葉中学校へ赴任し国語を教える。初任給百円。
- 昭和 7 年(1932)〔27 歳〕、3 月堀金村下堀の銀行家黒岩島(松中 18 回卒)の三女あやと結婚。その喜びを「みちのくの肴屋(いさばや)もなき栖なれど よくぞ来つるもわが若妻は」と詠んでいる。
- 昭和 10 年(1935)〔30 歳〕、11 月双葉を去り伊那中学校に転任。充実した教員生活を送る。臼井はのちに『残雪抄』(昭和 51 年筑摩書房)の中で「教師時代は愉快で楽しかった。毎日毎日が楽しかった」と回想する一方「僕はいつまでも教師をやっているつもりは最初からなかった。恩給なんて断じてもらわない」と広言していた。いずれは文学の仕事に進むつもりだった。これは少年時代からの宿願だった。しかし、教師生活に未練があって、なかなかやめられなかった。そのため広言にもかかわらず、「金千六百円あまりの一時恩給を頂戴してしまうほど勤続した」「僕は、校長、教頭はまっぴらだが、国語教師なら、いまでもやりたい。」とも述べる。文学的資質もさることながら、教師としての優れた才能も天性のうちに兼ね備えていた。
- 昭和 12 年(1937)〔32 歳〕、11 月北沢喜代治(1906～1980. 臼井と同じく松中出身。松高文科甲類の一年後輩、東大國文科卒。富山県で高岡中学などの教師を務めたのち長野県に戻り松本高女、後身の蟻ヶ崎高校の教師を務める。昭和 12 年に『早稲田文学』に宇野浩二の推薦で「雁の書」を発表。宇野浩二の疎開の労をとる。創作活動を展開。教師退職後の昭和 26 年に『屋上』創刊、主幹となる)、田中富次郎(臼井と同じく松中出身。松高文科乙類、東大文学部卒。のち信大教授、島崎藤村の研究家)と三人で同人誌『鳩の巣』を創刊し、小説「稲妻」を連載し評論「室生犀星」「『万葉集に帰れ』といふこと」を発表して活躍。しかし第 2 号に北沢が書いた小説「最後の銀貨」が警察当局の検閲にふれ、この同人誌は 3 号をもって発禁処分になった。



伊那時代の臼井(臼井吉見文学館提供)



同人誌『鳩の巣』を発行(同左)

□昭和 15 年(1940)〔35 歳〕、1 月古田晁と筑摩書房を創立し、その挨拶状を書く。昭和 16 年当時のメンバーは古田晁、唐木順三、中村光夫、竹之内静雄、和田英雄、斎藤正直、青木民江(経理)のほか伊那中教師のち松本女子師範教師の臼井吉見の 8 人。6 月松本女子師範学校へ転任。週に一度、同師範付属の女学校で教鞭を執ったほか付属小学校(翌年、付属国民学校と改称)の主事も兼ねた。同年、臼井を入れ総勢 8 名の筑摩書房では「古田、竹之内だけでなく、唐木、中村もまた、執筆依頼や原稿をもらいに著者廻りもした」状況だったから「唐木や古田から、臼井のところへ、しきりに東京へ出てくるように言ってきた」(和田芳恵『筑摩書房の三十年』〈昭和 45 年筑摩書房〉)。無理もない、臼井は教師生活と憧れの文学志向の板挟みにあってなかなか上京への踏ん切りがつかずにいた※資料 4。

資料 4 和田芳恵『筑摩書房の三十年』(平成 23 年筑摩書房)によると臼井は伊那時代「中野重治あてに長い手紙を書いた。中野重治が短い形で、斎藤茂吉に就いて書いたものを、ぼつぼつ発表しているのを読んだ臼井は、まとめて書かせたいと思ったからである。そのことを語った中野重治の言葉を速記から引くと『臼井君から斎藤茂吉のことを書けと言われた。(中略) お前は斎藤茂吉のことをチョロチョロと書くだけではなくて、まとめて書く責任があると言うんだね。かなり理詰めだったね。あの話は。あれには僕は参っちゃってね。参ったが、また非常に理詰めには責任があるっていうふうに言うということは、僕は断片的なものしか書いていなかったのに、それを読んでくれていたということで、感奮させられるところもあったしね』ということになる。/ この臼井吉見の手紙が呼び水になって、中野重治の茂吉論が分載発表されはじめた。まとめられて『斎藤茂吉ノオト』になった。昭和十七年筑摩書房から刊行。この名著は筑摩書房の声価をたかめた刊行物のひとつである。臼井は臼井なりに、遠くにいながら、力を貸してはいた」

□昭和 18 年(1943)〔38 歳〕、3 月松本女子師範学校を退職する。上京して週の半分は筑摩書房の経営に参画しながら、残り半分は東京女子大学(キリスト教系の大学で戦時にも別天地の如き自由な空気が漂っていた。当時まだどの女子大学も専門学校令による専門学校の扱いだった)に出講、ほどなく東京高等学校(尋常科 4 年・高等科 3 年から成る初の官立七年制高等学校。戦後、新学制になり高等科は東京大学教養学部的前身に、尋常科は東大教育学部附属中学校・高等学校の前身として東大に包括される)にも出講するようになる。東京女子大学では松尾芭蕉、井原西鶴、近松門左衛門などを講じた。臼井吉見の「国文科」出身者としての学識が滲み出るところであるが、のちの文芸評論を見ると国文科時代に自主的に(つまり藤村教授らのつまらない講義と無関係に)培った「日本古典文学」の学識が随所に溢れ評論に厚みを与えている(例えば井原西鶴を素地とした武田麟太郎論など)。東京女子大での臼井の評判は良く、教え子の中にのちに作家となる永井路子がいた。臼井が出向したもう一つの東京高等学校であるが、本来はイギリスの「パブリックスクール」を範にとりジェントルマン育成の自由な雰囲気であった。コンクリート校舎で

「ジュラルミン高校」の異名もあるなど極めて都会的な学校であったが、流石に昭和18年頃には軍事教育一色で窮屈な雰囲気漂い、臼井はいい思い出を述べていない。同年10月赤紙(召集令状)が来て陸軍少尉として松本五十連隊に入隊。松本へ出立の駅のホームで多くの東京女子大生が歓声で見送ってくれた。松本まで古田晁が送ってくれたが、「兄弟のようだ」といわれた友情の深さを感じさせる。

□昭和19年(1944)〔39歳〕、穂高町有明駐屯地(有明演習地)に駐屯、本土決戦に備え演習に励まされる。同年9月家族は三田村(のち堀金村三田、現安曇野市堀金三田)田尻の臼井の実家に疎開した。



有明演習地跡に建つ開拓記念碑(穂高有明豊里)



演習地跡説明板(穂高有明豊里)

□昭和20年(1945)〔40歳〕、2月入隊中にもかかわらず中箕輪村(現箕輪町)で松尾芭蕉について講演する。4月千葉県九十九里浜に出動。伐木隊長を命じられる。8月敗戦により復員。9月上京し古田晁、唐木順三、中村光夫らと筑摩書房の総合雑誌『展望』の発行を企画し編集長となる。10月、第一回編集会議を行うこの頃から「筑摩の経営者=社に拠る文筆家」というこの社の特質が確立されている※資料5。

資料 5 和田芳恵『筑摩書房の三十年』によると「“新しく出す雑誌の編集をまかされた僕はこざかしいはからいを捨ててかかろうと思った。執筆者のためによりき協力者たることができればさいわいだが、ともかく、こっちの信頼する筆者に、かねて胸底にたまっているものを吐露してもらうことだ。思い付きの愚問に対する即答答案ばかり書かされて、いいかげんうんざりしている向きもあるだろう。また、愚問なんか、てんで受けつけようとしらない人だって、いないわけはあるまい”と『蛙のうた』に書いているところに、考えが落ち着いて、唐木順三といっしょに、まず柳田国男を訪ねた。十月十二日のことであった。/臼井吉見は、昭和十八年に柳田国男を訪ねていて、初対面ではなかった。/唐木順三も、戦争のさなかに、単行本の『先祖の話』の原稿を貰いに足繁くかよっていた。/「こんど雑誌を創刊することになり、その編集を引き受けたから、ご教示を仰ぎたい」と臼井が言ったとき、お前にはたして出来るだろうかという表情が、ちらっと柳田国男の表情から覗かれた。それから、じっくりと、雑誌を作ることが、どんなにむずかしいかということ、柳田は、それとなく語った。相手の心のありようを正確につかんで、こ

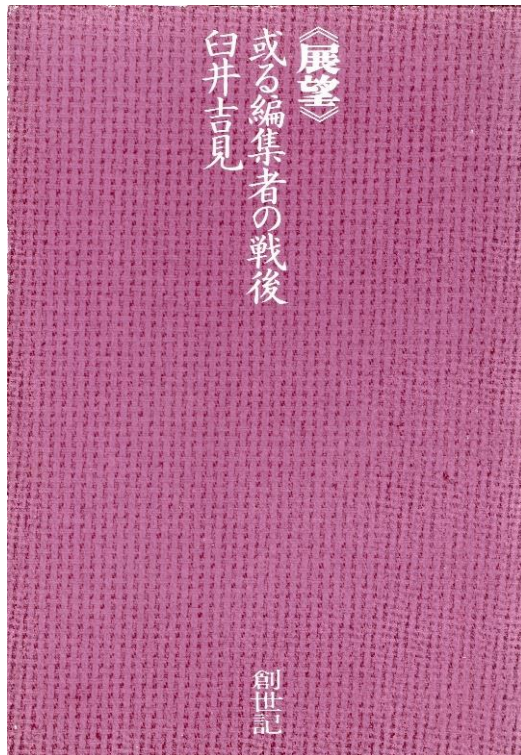
っちの思う方向へ導き出すのが、編集者の建前だと臼井吉見に説いたらしい。しかし、そのとき、臼井、唐木と中村光夫の肚は決まっていた。誰がひとのために出すものか、自分の読みたい雑誌を作りたいということであった。だから柳田国男の意見は、彼の学問と仕事からの当然な帰結だと臼井は感じ取った。/ 柳田国男は、唐木や臼井の強烈な個性を認め、また、その面魂にはひかれていたが、これが邪魔をするかもしれないという一抹の不安を感じたのであろう」とある。

□昭和21年(1946)〔41歳〕、1月付けの発行日で『展望』創刊(実際の発売日は前年の昭和20年12月15日である)。創刊号はA5判、本文160頁で、すべて9ポイント活字で組まれた。特別価格3円50銭で発行部数5万部だったが、発売後たちまち売り切れてしまった。創刊号の目次は次のようである。何かテーマとか統一されたものがあるわけではなく内容はバラエティに富む。創作欄(小説)に関しては筑摩書房が執心した永井荷風の傑作小説「踊子」が掲載されているが、これ以後同様に創作欄は「力作を一本だけ掲載する」ということを原則にした。

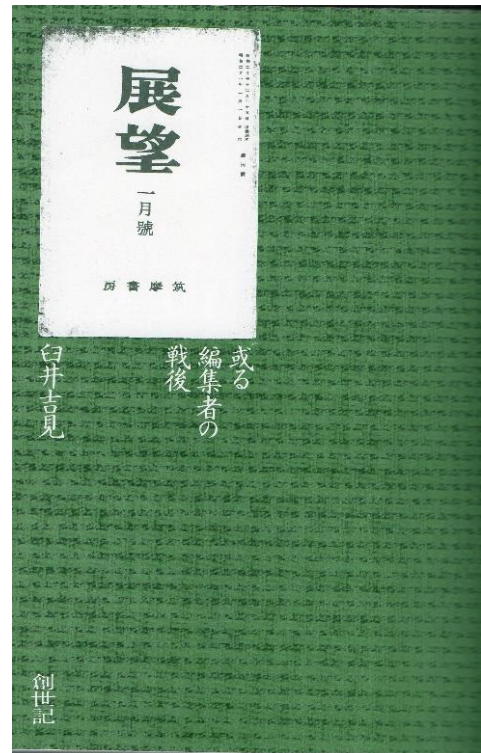
日本今昔の哲学		務台 理作
民族の自覚と歴史的意識		西谷 啓治
親鸞		三木 清
喜談日録		柳田 国男
杜少陵月夜詩釈		吉川幸次郎
或る日の対話		豊島与志雄
冬に入る		中野 重治
田山花袋論		中村 光夫
わが信条 E・M・フォースター		中野好夫 訳
踊子		永井 荷風

臼井は『展望』創刊以来、『展望』の「展望」欄に毎号テーマを決め、時評的な随想(エッセイ)を連載しはじめる。昭和52年創世記からその連載をまとめた『<展望> 或る編集者の戦後』が出されたが「あとがき」の中で謙遜気味に「まったく無名で、ものを書いたことのない僕に、いきなり「展望」欄の執筆を強請したのは、筑摩書房社長の古田晁であった」と述懐する。この「展望」欄への連載が引き金となってこれ以降、編集、評論執筆、小説執筆、講演などに八面六臂の活躍を見せていく。

『<展望> 或る編集者の戦後』の目次 人間の回復/ 農民文学について/言葉の奪還・詩の復活/現代と古典/短歌的なものへの訣別/国字問題/『聖ヨハネ病院にて』/新教育指針について/小泉八雲の『或る女の日記』/『偏奇館吟草』/堀辰雄と『花あしび』/ある獄中詩集について/プロレタリア文学の人間解体/空しき祈り/知識人論/文学史の課題/第二芸術論議/椎名麟三氏へ/露伴の死/志賀直哉と織田作之助/正宗白鳥/野間宏の『暗い繪』/西鶴と織田作之助/唐木順三の三木清論/横光利一の死/『細雪』の谷崎潤一郎/菊池寛の死/伝統とは何か/ (以下省略)



『展覧』或る編集者の戦後』 ケース



本体の扉

- 昭和 23 年(1948)〔43 歳〕、11 月疎開していた家族を東京都杉並区高円寺に呼び寄せ、家族そろっての生活が再開される。
- 昭和 25 年(1950)〔45 歳〕、財政上行き詰った筑摩書房を建て直すため、編集長にして副社長格の臼井吉見の発案で「中学生全集」(全 100 巻)の刊行を始め 7 月から毎月 3~4 冊のペースで配本。同じ 7 月に渡辺一夫(仏文学者)の勧めで翻訳刊行したゲオルギウ『二十五時』(河盛好蔵訳)が大ベストセラーになる。
- 昭和 26 年(1951)〔46 歳〕、9 月発行の 10 月号(69 冊目)をもって『展覧』を休刊。
- 昭和 31 年(1956)〔51 歳〕、『近代文学論争 上』が芸術選奨文部大臣賞を受賞。
- 昭和 33 年(1958)〔53 歳〕、9 月から臼井吉見一人の編集と解説で「現代教養全集」全 27 巻別巻 1 を立ち上げたが、このあたり前後から臼井の仕事は編集者から執筆者へ徐々にスライドしていった※資料 6。

資料 6 柏原成光『友 臼井吉見と古田』によれば「臼井の筑摩書房における編集面での活躍は、1965(昭和 40)年の「明治文学全集」(全 100 巻)までまだあるが、『展覧』休刊以後、臼井は筑摩書房だけでなく他社での書き手としての活躍も目立ち始める。評論家としての最初のまとまった成果は、1956 年に筑摩書房から刊行された『近代文学論争』である。これは、54 年 2 月から 57 年 11 月まで足かけ三年間、『文学界』に 40 回にわたって連載されたものであるが、56 年 10 月にその前半部が上巻としてまとめられただけで、後半部がまとめられたのは何と 19 年後の 75 年であって、上巻が筑摩叢書に収められたときであった。いかなる事情がそこにあったのか、資料が何もなくていま明らかにすることはできない。しかし

この仕事の評価の高かったことは、上巻が出ただけで、その年の芸術選奨文部大臣賞を受賞していることでも分かる。やがて、臼井の評論活動は、単に文芸分野にとどまらず、山びこ学校や旭ヶ丘中学問題、内灘やジラード裁判など、教育問題や基地などの社会問題にも及ぶようになった。その左にも右にも片寄らぬ常識人としてのバランスの取れた発言が、いま読んでも光る。その発言は多岐にわたり、65年にまとめられた『戦後』と称する彼の実質的な著作集をみると全12巻にも及んでいる。」とある。(注 下線は原文にはない)

□昭和39年(1964)〔59歳〕、総合雑誌『展望』復刊。復刊号の主な目次は次のとおり。総ページ230頁、特別定価170円。

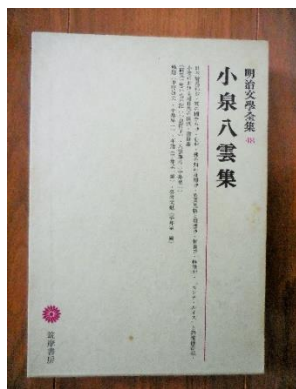
1970年は目標か	……………	竹内 好
秋風とともに	……………	中野 重治
〈座談会〉戦後知性の構図 …… 臼井吉見・鶴見俊輔・本多秋五・丸山真男		
常識について	……………	小林 秀雄
性の文学を批評する	……………	手塚 富雄
意味とひびき	……………	氷川 玲二
U・S・A 1964年 ドス・パソス	……………	西川 正身訳
〈座談会〉教育の理想は何か …… 鶴飼信成・江田三郎・岡本太郎・唐木順三・武谷三男		

和泉式部の歌集と日記	……………	寺田 透
近代人の地獄篇	……………	西脇順三郎

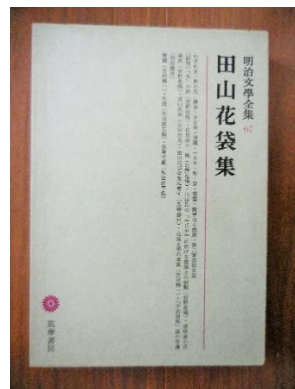
なおこの時のコラム欄に中村光夫「立憲政治」、久野収「ナショナリズムの再登場」、島崎俊樹「ミクロ・テレビとグローバル・テレビ」、創作欄には木下順二「冬の時代」、井上靖「後鳥羽院」が載ったほか、書評欄では河盛好蔵、福田歓一が起用されている。

この年、臼井が筑摩書房のために彼にとっての最後の大型企画「明治文学全集」(全100巻)を考える。翌昭和40年2月に『森鷗外集』から刊行開始。この全集の刊行には国文学科出身臼井の最後の執念のようなものが滲み出ている※資料7。

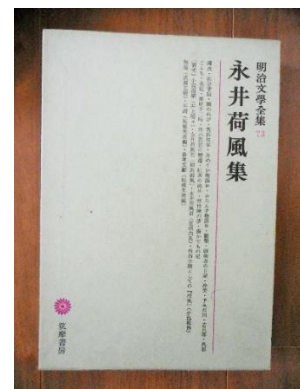
下の図版は『明治文学全集』より一部



第48巻『小泉八雲集』
(昭和45年)



第67巻『田山花袋集』
(昭和43年)



第73巻『永井荷風集』
(昭和44年)

資料 7 柏原成光『友 臼井吉見と古田』によれば「私(柏原成光)の入社したとき、筑摩書房は二つの大きな企画に追われていた。ひとつは『展望』の復刊であり、もうひとつは創業 25 周年記念出版と銘うった「明治文学全集」(全 100 巻)の刊行準備であった。「明治文学全集」は臼井が筑摩書房のために考えた最後の大企画といってよいだろう。私と同期で入った一人が早速その担当にまわされ、翌 65 年(昭和 40)年 2 月「森鷗外集」の巻から出発した。このシリーズは本巻の 99 巻がほぼ 20 年後の 83(昭和 58)年に完結し、このとき毎日出版文化特別賞を受賞した。しかし最後の索引の巻が出来たのは、それからさらに 6 年後の 89(平成元)年であった。完結までに実に 24 年、ほぼ四半世紀かかったのである。完結時には菊池寛賞を受賞したが、貴重な文化財的出版物と言って過言ではないだろう。/ 一方『展望』は私の入った年の秋 9 月に 10 月号をもって復刊され、1970 年を中心とする激動の時代に、オピニオン誌のひとつとしての役割を果たすことになった。/ 1964 年 7 月 10 日付の古田から唐木への手紙に次のようにある。『臼井が大力作(『安曇野』のこと—引用者注)でがんばり、蛙のうた、明治文学全集、展望(臼井の言によると、編集者教育がやっと実って、創刊号などはちょっとした雑誌になる筈、これでよし、とのことです)と大奮闘しているのです、ごくろうさんという会を二十五日の夕方からやりたいと思います』(注 下線は原文にはない)

そして遂に同昭和 39 年、臼井は初の小説であり代表作でもある『安曇野』の稿を起こすのである。第一部は『中央公論』に 39 年 7 月号から 40 年 4 月号まで連載。

その傍ら 4 月から 10 月にかけて「読売新聞」に「蛙のうた」を 90 回にわたり連載。

- 昭和 40 年(1965)〔60 歳〕、『安曇野』第一部を筑摩書房から刊行。
- 昭和 41 年(1966)〔61 歳〕、右目白内障手術、執筆を中断。3 月 NHK 放送文化賞受賞。
- 昭和 43 年(1968)〔63 歳〕、1 月左目白内障手術。12 月脳血栓で倒れる。
- 昭和 44 年(1969)〔64 歳〕、2 月から 3 月鹿教湯温泉で治療。7 月東京虎ノ門病院に入院、糖尿病治療。10 月退院。年末から『展望』へ『安曇野』第二部の連載を開始。
- 昭和 45 年(1970)〔65 歳〕、11 月『安曇野』第二部を筑摩書房から刊行。
- 昭和 47 年(1972)〔67 歳〕、2 月『蛙のうた』を筑摩書房から刊行。4 月『安曇野』第三部を筑摩書房から刊行。
- 昭和 48 年(1973)〔68 歳〕、6 月『安曇野』第四部を筑摩書房から刊行。10 月の初め『安曇野』(全五巻)の原稿が完結。10 月 30 日未明、筑摩書房会長古田晁が急死。
- 昭和 49 年(1974)〔69 歳〕、5 月『安曇野』第五部を筑摩書房から刊行、全五巻の刊行が完結。10 月第 10 回谷崎潤一郎賞を受賞する。この年、日本芸術院会員になる。
- 昭和 54 年(1979)〔74 歳〕、12 月『獅子座』第一部(賀茂行幸のこと<上>・<下>)刊行。
- 昭和 55 年(1980)〔75 歳〕、5 月唐木順三死去。10 月『獅子座』第二部(王政復古のこと<上>)を筑摩書房から刊行。
- 昭和 56 年(1981)〔76 歳〕、2 月『獅子座』第二部(王政復古のこと<中>)を刊行。二度目の脳血栓で半身不随。11 月『獅子座』第二部(王政復古のこと<下>)を刊行。
- 昭和 62 年(1987)〔82 歳〕、7 月 12 日臼井吉見死去。11 月 7 日妻あや死去。

2. 主要な業績

(1) 編集者として

- ①親友古田晁に乞われ筑摩書房の経営に顧問格で参画。昭和 21 年 1 月総合雑誌『展望』を筑摩書房から創刊、編集長として活躍。戦後の文化の大きな指針となるような文学作品、論文、評論等を「厳選掲載し、中に設けた〈展望〉欄にみずから筆をとってユニークな文芸時評・社会時評を発表して、文壇・論壇をリードした」（東京堂版『現代作家辞典』）。
- ②『現代教養全集』（昭和 33～35）、『日本短編文学全集』（昭和 42～45）の責任編集。
- ③筑摩書房の格調を岩波書店並みに高からしめた「明治文学全集」の企画・刊行。

(2) 評論家として

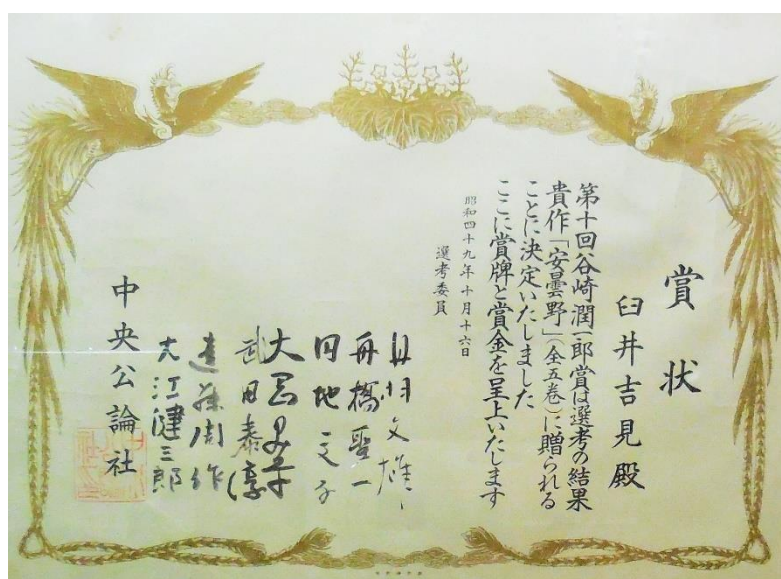
- ①文芸評論『近代文学論争』（上）（下）の執筆・刊行。（上）は昭和 31 年芸術選奨文部大臣賞。（下）は（上）から 19 年後の昭和 50 年に刊行。大変高度で質の高い評論集である。
- ②文芸評論『大正文学史』の刊行。帯「多端な大正期の社会思潮的推移を克明」に記述。
- ③総合雑誌『展望』の「展望」欄に連載した時評的エッセイを『〈展望〉 或る編集者の戦後』にまとめ創世記から刊行。この連載エッセイは高評で臼井の存在を単なる編集者から有能な評論家の立場へと押し上げた。
- ③作家論『人間と文学』（昭和 32 年）
- ④文芸評論だけでなく教育評論・社会評論など幅広いジャンルの評論を執筆し『戦後』（全 12 巻）にまとめ昭和 40 年 12 月から昭和 41 年 11 月にかけて筑摩書房から刊行、一流の評論家の立場を不動のものにした。かつて昭和 15 年に古田晁が臼井を連れ中野重治を訪ねた際に臼井のことを「ものを書こうとしている男だからよろしく」と紹介し、臼井に物を書かせ筑摩書房から出すことを願望していたが、それがここで大輪の花を咲かせた形になった。

(3) 小説家として

- ①代表作『安曇野』（全五巻）の執筆・刊行。昭和 49 年第 10 回谷崎潤一郎賞受賞。



谷崎賞授賞式（臼井吉見文学館提供）



谷崎潤一郎賞賞状（同左）

- ②『獅子座』の執筆、刊行。稿はまだ半ばであり未完の大作とも呼ぶべき長編小説。